ま・ち・か・どズームIN!

みなさんからのすてきな情報を待ってます!

健康福祉都市を目指して
さわやかフェスティバル開催

さわやかフェスティバルが7月31日、ホワイトキューブで開催されました。

会場には、体力測定や相談などの健康づくりコーナー、ボランティア団体や福祉施設の展示即売コーナーが勢ぞろい。今年はNHKの福祉スポーツイベント「ハートスポーツフェスタ」や、漫才師林家カレー子さんの講演なども同時開催され、約2、500人の入場者で大にぎわいでした。

■NHKハートスポーツフェスタ
「シッティングバレーボール教室」

▲何回続くかな？「愛の円陣パス」

◀元バレーボール日本代表の大林素子さんも参加して、座ったままで行うバレーボール「シッティングバレーボール」教室が開かれました。

■林家カレー子さんの講演 ▶
「プラス思考で人生イキイキ」と題して、全国の高齢者に交通費のみで漫才を届けた体験談や、貧乏でも楽しかった下積み時代などをユーモアを交えて講演いただきました。

▲カレー子さん

プロの大工さんと木工製作
親子木工教室

8月1日、小学生たちに夏休みの思い出をと、白石市建設職組合青年部が企画し、余った木材などを持ち寄って中央公民館で恒例の親子木工教室が開催されました。

教室には73組の親子が参加。本棚や巣箱などをプロの大工さん30人にお手伝いしてもらいながら、親子で楽しく製作しました。

会場の外ではかき氷やスイカも振る舞われ、参加者たちは夏休みの1日を満喫していました。

手づくり絵本に想いを込めて
手づくり絵本講習会

7月29日と8月5日の2日間、鈴木智恵子さんを講師に、図書館で夏休み恒例の手づくり絵本講習会が開かれました。

講習には、小学生を中心とした18名が参加。海やスーパーボール、宝探しなど、自分たちで内容を考えた楽しい絵本を、表紙や中身、製本まで、すべて手作りで作り上げました。

このオリジナル絵本は、11月に図書館で開く「手づくり絵本展示会」に展示されます。ぜひご覧ください。

思い出に残る夏休みに
海老名市の小学生が福岡小を訪問

今年で姉妹都市締結10周年を迎える海老名市の小学生4名が7月22日、「ふるさと豆記者訪問団」として福岡小学校を訪問しました。

福岡小学校では、同校の児童会運営委員の皆さん10名が笑顔でお出迎え。お互いの学校やまちの様子などについて紹介し合いました。

福岡小の児童に教えてもらいながらの弥治郎こけし絵付けや、流しうーめん体験などで、子どもたちはすっかりうち解けて仲良しに。夏休みのいい思い出になったようです。

白石川に涼をもとめて
めだかの学校開校

白石川緑地公園一帯で7月25日、多彩な川遊びを楽しむ「めだかの学校」が開校。うだるような暑さの中、涼を求めるように大勢の子どもや親たちが会場に集まりました。

捕まえたニジマスのはらわたの取り方や焼き方を学ぶ「野外料理指南」、ゴムチューブのいかだで川を下り、流れの強弱や深さによる色の違いなどを学ぶ「冒険川下り」、そして河原の石に色を塗ってつくる「ストーンアート」など、参加者は多彩な体験学習を満喫しました。

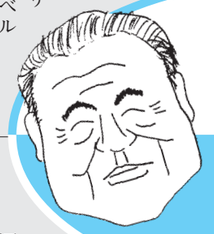
若い労働力の確保・育成を
ハローワークと共同で求人要請

高校生の求人解禁を前にした8月6日、川井市長が白石公共職業安定所の曽根所長とともに市内の企業と社会福祉法人10ヵ所を相次いで訪問。要望書を提出し、「できる限りの協力を」と高校生採用枠の拡大などを各事業所に強く働きかけました。

▲NECインフロンティア東北を訪問した川井市長

長引く景気の低迷などの影響で、市内の雇用情勢は依然として厳しく、来春の高卒者の求人についても、就職希望者数を大きく下っている状況です。

川井市長の せせらぎトーク
「市民オペラ」



7月17、18日にキューブで上演された「ラ・ボエーム」は、市民参加のオペラとして絶賛を博した。

音楽評論家玉木正之氏は早速「オケ・ピットは段ボールで囲ってあり、舞台装置も段ボール。衣装はすべて新聞紙。演出・装置・衣裳を担当した日比野克彦さんの指導で、市民参加で作られたもの。背景の絵は幼稚園児の製作。モンドリアン調の巨大な幕も手作りで、市役所の野球部員が引きあげる。何もかも美しく、見事！これまで見た市民参加で最高の出来！いや、ハリー・クプファーの演出したベルリン・コーミッシュオーパーの舞台やバズ・ルーアーマンが演出したシドニー・オペラの舞台に比肩するほどの素晴らしい『ボエーム』！」とホームページに書き、以後いろんなメディアが取り上げた。

東北放送では30分の番組で裏舞台が放映された。毎日新聞の夕刊の全国版『コンサートを読む』では、「そこでは子どもたちの絵と、プッチーニが描いたパリの屋根裏部屋が、自然に一体となっていた。演出・装置・衣装を受け持った美術家の日比野克彦、指揮の井上道義、芸術監督の三枝成彰は、忘れ難い不思議な空間をつくりだした」とある。

河北新報では7月20日フォト2004の写真集。7月24日に『独創性舞台の随所に』の囲み記事。また、8月2日の日経、文化往来の欄に「市民参加型オペラの一つの理想を現出させた」とある。私の友人たちは、日経を読んでいる連中が多い。素直に褒めてくるのもあれば、昔のオンチが何でオペラなのと聞いてくるのもいる。2002年、七十七銀行の勝股康行会長が書いてくれた『古希の同期生』以来の反響である。

上京して、赤坂の寿司屋に寄った。板さんが「川井さん、白石のオペラが大成功だったというじゃないですか。お客さんの何人か、カウンターで話してましたよ」。この寿司屋に音楽愛好家が集まることは知っていた。いつか、中年の上品な女性が二人、寿司をつまみ『行って来るわね』。板さんにあの人たちどこに行くのと聞いたら、「今からサントリーホールです。オペラを見る前の腹ごしらえに寄った方々ですよ」東京と地方の文化の差を見せつけられて、うらやましい思いがした。

「貧しい文化しか持ち得ないために、市民の心まで貧しくていいのか」は、私の問い続けたテーマである。かつて、文化果つる地といわれた白石に、プロと市民の共同作業で作り上げられたオペラが全国に情報を発信する。延べ千人といわれる市民ボランティアやキューブ合唱団の皆さん、ご苦労様でした。

そして、病院で点滴をしながら頑張ってくれたミミ役の塩田美奈子さん。公演の前日、キューブのホールで一人発声の練習をしていたムゼッタ役の中嶋彰子さんをはじめ、プロの皆さんの舞台にかけた思い入れは、市民ボランティアや合唱団の熱意に触発された面もあるだろう。

「ボランティアとのワークショップを通し、創造の喜びを分かち合える企画」に賛同し、30回も白石を訪れ、指導してくれた日比野克彦さん。仙台フィルをたっぷりと歌わせ、市民コーラスをまとめ上げてくれた井上道義さん。そして何よりも芸術監督の三枝成彰さんに心から感謝したい。